

2016年度

論文要旨

(演習科目 アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科A演習Ⅱ)

(指導教員 高橋義文客員教授)

アメリカ合衆国における1990年代の  
多文化主義をめぐる議論の軌跡

—アーサー・M・シュレジンガー・ジュニアおよび  
ロナルド・タカキの議論を中心として—

聖学院大学大学院

アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科

アメリカ・ヨーロッパ文化学専攻 (博士前期課程)

学籍番号 114MC701 氏名 大場 昂二

本論文は、1990年代の多文化主義に対する賛否両論を整理して、その上でアメリカ合衆国の国民的統合を展望しようとするものである。

近代に入り、世界の平和を大きく揺るがした、第一次世界大戦および第二次世界大戦で、アメリカ合衆国の参戦は、民主主義陣営に勝利をもたらした。さらに第二次大戦後の東西冷戦では、核戦争の恐怖に脅える世界で、ソ連の政治的崩壊によりアメリカ合衆国の主導する西側陣営は勝利を得た。

今日、不安定ながら世界秩序が辛うじて保たれているのは、直接、間接にアメリカ合衆国の存在があるからであるといえよう。近代の世界史の上で、アメリカ合衆国の果たした役割は大きい。

しかし、今日、アメリカ合衆国において、国内はもとより国際的にも注目されている問題がある。

その第一は、21世紀半ばには、合衆国の白人人口が過半数を割るという衝撃的な予測があることである。

第二は、1980年代から1990年代にかけて、学校教育における西洋中心的な教育に批判の声が上がり、黒人など非白人マイノリティの学生と教師らが中心となって起こした「カリキュラム改革運動」の思潮と運動は西洋的な原理や価値観を批判する黒人たちのアフリカ中心的な動きや、民族的多様性を強調する思潮と合流して、1990年代には多文化主義（Multiculturalism）と呼ばれるようになった。そして多文化主義をめぐる議論が先鋭化した時期もあった。しかし、この多文化主義には、擁護する議論がある半面、批判する議論もある

こうした多文化主義をめぐる議論がある状況で、アメリカ合衆国における多文化主義の今後の進展如何は国民的統合にどのような影響を及ぼすのか、重大な関心をもって注視する必要がある。

また、多文化主義の主張は、今迄抑圧され、蔑まされ、無視されてきたアフリカ系アメリカ人を中心としたマイノリティ集団の運動として、特に教育の分野において展開された。そして究極的には、アメリカ合衆国の国民共通のアイデンティティに対する問いである。

多文化主義はアメリカ合衆国の国民的統合を解体させるのか、それとも、多様性に配慮してアメリカ合衆国を統一に向かわせるのか、この二つの立場で争われている。

ここで、多文化主義の賛否両論を概括してみると、まず擁護側の主張としては、急進派のモレフィ・キート・アサンテの主張があげられる。アサンテは、こう主張する。（1）ラ

ヴィッチの唱える「共通文化」とは、ヨーロッパ中心的な白人ヘゲモニーの主張する文化である。(2) アフリカ中心主義とは、ヨーロッパ的な人間理解、歴史認識、人種観に対する拒否である。(3) アフリカ中心主義者はアフリカの視点を学校教育のカリキュラムに反映させる重要性を主張するが、その視点を唯一正しい見方であると押しつけるような自民族中心主義者ではない。

これに対し、アーサー・シュレジンガー、Jrはアサンテの主張を批判する。(1) アサンテの民族性の信仰の基本的考え方の含意は、すべてのアメリカ人を民族的・人種的基準に従って分類しようということである。(2) 民族的信条の根底にある考え方は、アメリカが個人から成る国ではなく集団の形成する国であるということである。(3) 大部分のアメリカ人は、「統一こそが第一」という立場と「民族性こそが第一」とする立場のいずれかの極端に走ることは抵抗するだろう。

シュレジンガーと同様、多文化主義に批判派のラヴィッチは、アサンテの主張する個別論は自民族中心主義であり、アメリカの共通文化の存在を否定し、ひいては社会の崩壊を招く危険思想であると強く批判する。

ロナルド・タカキは、次のように主張する。(1) 今日、われわれにとって必要なことは、一国民としてだけでなく、人類の構成員として、われわれの全体性を否定しないことである。(2) われわれの多様性こそが、アメリカの形成の中心にあった。

以上の多文化主義と国民的統合をめぐる4人の主張と、議論を客観的に捉えるため、辻内鏡人、森茂岳雄、有賀 貞の見解、さらにアメリカ合衆国の国民的統合に影響を与えると考えられる国勢について、ジョセフ・ナイおよび渡辺靖の見解を取り上げ国民的統合の展望を試みた。

次に国民的統合の歩みを概観してみる。

まず、第二次世界大戦が合衆国のエスニック集団に与えた影響が挙げられる。それは、それまで無視されてきたエスニック集団にとって、アメリカ軍兵士として戦うことはアメリカ人であることを認めさせる機会と捉えることになった。他方で合衆国指導層に人種差別を否定する動機となった。

また、国民的統合の視点からみた学校教育をみると、現在、使用されている社会科の教科書(中3から高1対象)「アメリカ史」の内容は、多文化教育の思想に沿った内容が盛り込まれており、国民的統合の方向に向かって学校教育の歩みは前進している。

さらに、国民的統合の視点からみた、アメリカ合衆国が生んだ思想として、ライン・ホ

ールド・ニーバーの「謙虚」の思想、およびマーティン・ルーサー・キング、Jrの「非暴力」の思想は、国民的統合の条件として評価されてよいと思料する。

加えて、移民が合衆国経済、社会のダイナミズムに与える影響は見直されてよいであろう。移民は多文化と不可分であるからである。

以上、多文化主義を検討した結果、アメリカ合衆国における国民的統合の展望をもつことができた。

アメリカ合衆国における多文化主義および国民的統合の今後の進展如何は、合衆国自身の社会の秩序と安定に影響を及ぼすばかりでなく、世界の秩序と平和にも影響を及ぼすと考えられる。

わけても国民的統合が揺るぎないものとなるには、困難が伴うであろうが、アメリカ合衆国のエスニック集団への理解と融和が進展することが重要なカギを握っていると考えられる。合衆国の国民的統合の進展は世界の民族間、国家間の融和のモデルを提示することになり、ひいては世界に希望をもたらすものである。それは新しい次元の世界への展望をもつことができることともなろう。

聖学院大学大学院

アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科

アメリカ・ヨーロッパ文化学専攻（博士前期課程）

学籍番号 114MC701 氏名 大場 昂二